

# 東舞子

2016/06/30 (7月号)

神戸市立東舞子小学校

平成 28 年度学校だより

<http://www.kobe-c.ed.jp/hmi-es>

## 神戸のトイレを救え！

夏本番を迎え、連日 30 度を超える真夏日が続きますが、一昨年度よりすべての普通教室に配置された空調設備（エアコン）のお陰で、子供たちは、蒸し暑い梅雨の時期も、快適な教室環境で学習に取り組んでいます。また、6月に実施されました運動会では、大勢の保護者や地域の皆様から温かいご声援と励ましをいただき、子供たちは、それぞれの持てる力を精一杯発揮することができました。本当にありがとうございました。

さて、先日、料理研究家で神戸大使でもある白井操氏より、ご自身の著書である「食から学ぶ震災の記録」という本を神戸市に寄贈していただき、神戸市立中央図書館を通して、市内の各小学校へ配付されましたので、ご紹介いたします。

この本は、阪神・淡路大震災から 21 年を迎えて、白井氏が「食」を切り口にして、当時懸命に災害に立ち向かった人々の痛みやつぶやき、学びを聞き取り調査をもとにまとめた内容です。私が興味深かったのは、水洗化率 98%以上である神戸市のトイレは、震災による断水のため、被災した地域では、下水道が壊れていない所も含めて、ほぼ使用できない状態になり、多数の被災者が身を寄せた避難所（多くは学校施設）のトイレは厳しい状況に置かれ、排泄を我慢するために水分や食事の摂取を抑え、健康を害した事例が多数報告されたということです。つまり、災害時には、飲食の確保と同じくらい、トイレの確保が必要であるということなのです。食べたらず、これがないと、人はあつという間に体調を崩します。非常時こそ、排便、排尿をしっかり行い、しっかり食べたいものであると白井氏は訴えています。また、震災後わずか3日目に、岐阜県から救援のためのバキュームカー 31 台と 65 人の作業員が排泄物の処理のため、神戸市へ駆けつけたというのです。この救援隊は、昔、伊勢湾台風で名古屋や岐阜が被害に遭った時、神戸市の職員がいち早く応援に駆けつけたお返しとして避難所の汲取り支援に駆けつけてくれたそうです。私も当時、須磨区の小学校に勤務していましたが、避難所となっていた体育館のトイレの便器に放置された糞尿を流すため、プールに溜めてあった水を、何度もバケツに汲んでは運んでいた記憶があります。このことを受け、現在、神戸市では、地域防災計画の一環として、指定避難所である小中学校を中心に「公共下水道接続型仮設トイレ」の配備を進めています。東舞子小学校にも、現在3基の仮設トイレが緊急時に対応できるよう配備されています。

阪神・淡路大震災の犠牲者のうち 14%にあたる約 900 人の方が被災後の体調悪化などで亡くなられた関連死だそうです。この震災は、地震を生き延びた被災者が、過酷な避難生活で再び命の危険にさらされる現実を示し、それが高齢化社会の大きな課題であることも浮き彫りにしています。白井氏は、避難生活の厳しさのひとつが「食」であり、避難所の寒さや暑さ、水不足などでトイレを我慢しがちな状況も、高齢者や持病を抱えている人たちの体調悪化に拍車をかけていると指摘しています。

私たちは、日頃当たり前のように、トイレで用を足していますが、日常生活が便利になり過ぎて、もしもの備えを怠っているようなことがあるように思えてなりません。衣食住、ライフライン、医療、そして、トイレ。阪神・淡路大震災を経験した私たちだからこそ、後世へ伝えていかなければという思いは白井氏と同じです。6月に地震調査委員会が発表した予測によると、今後 30 年間で南海トラフ地震の発生により、震度 6 弱以上の揺れに見舞われる確率が神戸では 45%もあるそうです。もしものときに備えるとともに、梅雨の季節は、集中豪雨や台風にも十分お気をつけください。

1 学期も残すところ 3 週間。よい締めくくりができますようにご支援、ご協力をお願いします。

校長 梅鉢 泰博